

こんにちは
ブレインテックです



今回で紹介するのは、京都府木津川市の関西文化学術研究都市（けいはんな学研都市）の一角にある、同志社国際学院初等部・国際部です。一つの校舎の中に2つの学校を併設し、国際バカロレアに準拠した特色ある教育を行っている同校の図書館、DIA Library について、司書の中田様と、国際部日本語科の木村先生にお話を伺いました。

——初等部、国際部それぞれの概要について教えていただけますか。

初等部、国際部ともに、国際バカロレア^(※1)のカリキュラムに基づいた探究型の学習を行っています。初等部は授業の55%を英語で受けるバイリンガルスクールの一条校^(※2)です。国際部は、小学校1年生から高校3年生までの12学年に対応するインターナショナルスクールで、国際バカロレア、およびWASC^(※3)の認定校となっており、1クラス10人未満の少人数クラスが特徴です。



——図書館は、初等部、国際部共通で利用されているのですか。

はい。朝8時から夕方4時半まで開館していて、必要に応じて延長することもあります。各クラスルームにも教

第86回

同志社国際学院 DIA Library

2018年3月

室おきの本がたくさんあるのですが、授業で使う本は、libraryからクラスルームにまとめて貸し出すことも多いので、書架の1段がまるごと無い、といったこともあります。そういう場所には、専用の代本板のようなものを入れて、行き先がわかるようにしています。



——蔵書構成はどのようになっていますか？

生徒数としては初等部のほうが多いので、蔵書構成も初等部を対象としたものが多くなっています。現在libraryには2万5千冊余の蔵書があり、割合としては英語の本のほうが少し多いですね。授業の調べもので使うのは圧倒的にNDCの0～8類で、絵本でも内容によってはMARCの分類を採用せず0～8類の分類をユニット(単元)に合わせてつけることがあります。ですから、分類で見ると一般的な学校図書館より9類(文学)の割合が少ないです。雑誌や新聞も日本語、英語のものをそれぞれ揃えているほか、新聞データベースや百科事典データベースなども契約しています。

——英語の資料もNDC(日本十進分類法)で管理されているのですか。以前は日本語の本はNDC、英語の本はDDC(デュエイ十進分類法)と別々

の分類体系を使っていて、図書館システムも日・英で別々のものを使っていました。日本語の本を管理していたシステムに不具合が多く変更の必要が生じたため、検討の結果、情報館を導入することになりました。その後、ブレインテックさんの協力もあり、英語の本も情報館で管理できるようにして、分類もNDCに統一しました。背ラベルの貼り換え作業は大変でしたが、日・英の資料を一度に検索できるようになり、便利になりました。



この学校では1単元を「ユニット」と呼び、同じテーマを学年ごとに何度も取り上げます。学年によって同じテーマでも内容が違い、段々と学びを深めていく形になっているので、同じテーマの本でも、対象年齢ごとに違う本が必要になる場合もあります。日本語・英語がどれくらい使えるかは子どもによって全然違うので、同じテーマを調べるときに日本語の本を使う子もいれば英語の本を使う子もいます。

そうしたこともあって、最近、分類を



統一しても別々に排架していた日本語の本と英語の本を、混排する(一緒に並べる)ことにしました。書架サイン等では分類を日英並記しています。

——資料データの入力はどのようにされていますか？

日本語の本は、TRCマークを使っていますが、分類は館の方針に合わせて修正することも多いです。英語の本は購入書店の発注データをCSVデータとして取り込むことができますが、追加修正も多く、労力は手入力と同じくらいかもしれません。



——情報館の導入は2017年。導入して間もないですが、いかがですか。

以前のシステムに比べると不具合なく使えるのでありがたいです。一括置換などの機能も便利に使っています。また、ここでは初等部が春、国際部が秋と1年に2回入学があるので、進級処理の作業も2倍ですが、システムが1つになったため労力は半分になり、なんとか自力で完了しました。導入時に旧システムからのデータ移行を自分で行ったり、分類の統一を行ったりした際にも、ブレインテックの方に色々サポートしていただき、感謝しています。

——OPACサービスを使われていますが、皆さんの反応はどうですか？

画面が子ども向けに作られているというわけではありませんが、初等部の子ども問題なく使えてるようです。図書館のカウンターにある検索端末で検索をするのが好きな子も多いですが、iPadを持っているので、それで検索してから図書館に来る子もいます。

——木村先生から見た図書館は、

どのような存在でしょうか？

この学校では、図書館はいつも開いていて、司書が常駐しています。生徒もたくさん図書館を使うし、教師も授業の準備や調べもので頻繁に図書館を利用します。授業の途中で調べものをするために生徒が自分で図書館に行ったり、そこでわからないところがあれば司書に質問して探し方のヒントをもらったりということが日常的に行われています。もちろん、図書館で授業をすることもあります。何の下調べもなく無責任に「libraryで調べておいで」とは言えないので、どのテーマについてどういうレベルの本がどれくらい図書館にあるのかといったことをあらかじめ自分で調べますし、日頃から、図書館でどういう本を手に入れられるのかなどを司書の方に相談しています。



さらに、私は時間があれば書架の前に立って本を手取るようにしています。それぞれの本で、使われている漢字やルビの程度、どれくらい難解な言葉を使って説明しているかなどは、そうしないとわからないからです。

——図書館は授業をするために欠かせないもの、ということですね。

そうですね。探究型の学習では、オープンエンド型の問い(あらかじめ決められた答えを用意したものではない問い)が多い。しかしそれは、答えは何でもいいということではありませんから、そうした問いを出すために、自分たちも事前にたくさん調べないといけない。だから図書館を使わざるを得ないわけです。

——図書館の資料では、こういったものを使うことが多いのでしょうか？

子どもたちは、雑誌や新聞などの定期刊行物を使うのがうまくないので、授業では意図的に使わせるようにしています。また、彼らはすぐインターネットで調べようとしますが、検索キーワードの設定など、探し方が悪いので見つからないことが多い。百科事典の索引などを使えるようになることで、どういうキーワードで探すといいのかといったことを学べば、インターネットでの検索でも、もっと適切に探せるようになるはずだと思います。

——司書の立場として、こうした先生方のニーズに添えていくのは、なかなか大変そうですね。

そうですね。この学校では先生方が何かあれば司書に相談するということが当たり前になっていて、期待も大きい。その分責任も重大ですが、そうした環境があるのでlibraryとしても色々なことにチャレンジできると感じています。

——これからも、先生や生徒の皆さんの期待に添えていくために、私たちも図書館システムの面でご協力していきたいと思います。本日はありがとうございました。

※1 国際バカロレア:国際バカロレア機構が提供する国際的な教育プログラム。

※2 一条校:学校教育法第一条に定められた学校。

※3 WASC(米国西部地域私立学校大学協会):アメリカに本部がある教育認定機関。WASC認定校で12年の課程を修了した18歳以上の者には、大学入学資格が認められる。

同志社国際学院 DIA Library

〒619-0225
京都府木津川市木津川台 7-31-1
TEL: 0774-71-0810

初等部 Doshisha International
Academy Elementary School (DIA)
<http://www.dia.doshisha.ac.jp/>

国際部 Doshisha International
School, Kyoto (DISK)
<http://www.diskyoto.com/>